

研究ノート

内モンゴル自治区のモンゴル民族小学校における モンゴル伝統音楽学習の現状と課題

—ソム、旗、市、首府の4つのモンゴル民族小学校における音楽教育の比較—

The Current Status and Issues of Mongolian Traditional Music
Learning at Mongolian Ethnic Elementary Schools in Inner Mongolia:

A Comparative Study on Music Education in the Four Mongolian Ethnic
Elementary School in Sumu, Banner, City and Capital Region

アルサラン

(広島大学大学院教育学研究科)

AERSILENG

(Graduate School for Education, Hiroshima University)

キーワード: モンゴル民族、小学校、伝統音楽、民族アイデンティティ

Keywords: Mongolian ethnic group, elementary school, traditional music, ethnic identity

目 次

1. はじめに
2. 調査の概要
 - 2.1 対象地域と学校
 - 2.2 調査の方法
3. 調査の結果
 - 3.1 教科書に取り入れられたモンゴル伝統音楽
 - 3.2 4つの小学校の音楽科授業の内容
 - 3.3 4つの小学校におけるモンゴル伝統音楽の学習
 - 3.4 モンゴル伝統音楽の学習が子どもたちの民族アイデンティティに与える影響
4. 総括

1. はじめに

中国は56の民族を有する多民族国家である。中国では漢民族を除き、残り55の民族を「少数民族」としている。少数民族の総人口は漢民族の人口に比べ、極端に少ない。55の少数民族全体の人口を合わせても中国総人口の9%にすぎない。中国には、五つの民族自治区がある。内モンゴル自治区は中国の北部に位置し、面積が118万平方キロ、人口は約2,471万人、そのうちモンゴル族は422万人であり、内モンゴル総人口の17%を占めている¹。長期にわたる多民族文化の融合・同化の複雑な環境において、内モンゴル自治区全体に言語、文化上の漢化が進み、民族文化、民族教育の発展をはじめ、民族学校における音楽教育もさまざまな問題に遭遇している。民族伝統音楽の伝承に学校教育が重要な役割を果たすことはよく知られる。

近年、国家教育部から、音楽教育は他の科目と同じく学校教育の中で重要であることが提唱されてきたが、「応試教育」²の観念から解放されていないため、音楽教育はいまだに学校教育の中で重視されていないのが現実である。

中華人民共和国国務院は、「民族教育を發展させることに関する決定」³を発行し、中華文化を継承すること、少数民族の優秀な伝統文化も継承すること、そしてそれらを發展させることを強調している。また、中国の優秀な伝統文化を小中学校の教材と授業に融合させ、民族地区の学校で民族の優秀な伝統文化の伝承活動を展開させると強調した。

昨今、小学校における民族伝統音楽に関する研究は数多く行われている。筒石賢昭・沈莉卓(2013)は、中国にとって、伝統音楽は自国の民族文化の特徴を表し、民族アイデンティティを意識させる重要な文化として位置づけられていると述べている。張婷(2015)は、内モンゴル自治区の各地域の小中学校の音楽科教師が、積極的にモンゴルの伝統的な音楽文化を学習し、授業を通して子どもたちに民族意識と民族的審美眼を伝え、モンゴル民族音楽に興味を持たせるように工夫をするべきと述べた。そして、子ども自身の特徴に合わせて授業モデルを改善し、教育内容を調整することは音楽教育の民族化に役立つと主張した。張惠萍(2016)は、「義務教育音楽課程標準」(2011年版)の理念の下で出版された最新の音楽科教科書を対象に研究を行い、音楽教科書に取り入れられている「中国伝統音楽」⁴を民間歌曲、民族舞踊曲、民族器楽曲、中国の古典演奏劇などのジャンルごとに分析し

¹ 中華人民共和国国務院(2010)「第六次全国人口普查内蒙古自治区蒙古族人口数据」

http://www.360doc.com/content/18/0520/15/8527076_755455690.shtml (2019年6月15日閲覧)。

² 応試教育とは、試験対策を目的とした教育理念と教育方式である。中国では、進学率によって学校と教師が評価され、試験による児童・子どもの選別と選抜を重視する傾向が未だに存在する。音楽科授業は子どもたちの進学に役立たないため、学校が夏休みや冬休みに入る1か月ほど前から音楽科授業を中止し、その代わりに主要科目である算数やモンゴル語・漢語の授業(復習など)を行うことがある。科目の成績によって教師たちの業績を決定する制度もあるので、音楽科教師はいくら優秀であっても評価が相対的に低く、主要科目である算数や国語などを教える教師たちと比べて明らかに差別がある。そのため音楽科教師には積極性が欠ける傾向もあるのが現実である。

³ 中華人民共和国国務院(2015)『關於加快發展民族教育的決定』、国発46号

http://www.gov.cn/zhengce/content/2015-08/17/content_10097.htm (2019年6月8日閲覧)。

⁴ ここで言う中国伝統音楽とは、中国政府の国家統合、そして統一した民族意識を高めることの主張の下、漢民族を含み、55少数民族各自の伝統音楽と各地域の特色ある伝統音楽すべてを含んだ中国伝統音楽のことである。

た。その結果、張恵萍は、音楽科教師たちが音楽の授業を行う上で、新音楽課程標準の教学目標に従って、教学目的を課程目標から学年目標へ、そして、単元目標から授業目標へとより詳細に設定していくべきであると述べ、さらに、鑑賞の授業、ゲーム遊び、体験学習、実践活動などを積極的に取り入れた教授法によって、子どもたちに中国の伝統音楽、地方の特色や文化などに興味を持たせることができるかと主張した。楊夢嬌 (2016) は、内モンゴル自治区のフフホト市、オラーンチャブ市の2つの市における3つの民族小学校を対象に研究を行い、地域と社会背景が異なる3つの小学校におけるモンゴル伝統音楽の伝承方式がそれぞれ異なっていることを明らかにした。貴雪 (2018) は、①小学校における民歌学習の意義、②内モンゴルの地域民歌及び発展経緯、③小学校の音楽教育における内モンゴル地域民歌学習の現状調査といった3つの方面から研究を行い、内モンゴルの小学校の音楽教育における地域民歌学習の改善のため、①教師の民族音楽についての見識、②教育思想及び観念、③教育設定といった3つの方面から提案している。特に②において、教育方法の改善、音楽実践活動の重視、教育内容の調整、伝播方式の改進黨など4つの面を強調している。

以上のように、内モンゴル自治区の小学校の音楽教育における伝統音楽の研究がなされている中、経済発展や民族構成、生活スタイルなどが明白に異なるそれぞれの行政単位における音楽教育を比較した研究は少ない。また、モンゴル伝統音楽とモンゴル民族アイデンティティ形成との関連性に関する研究は管見の限り見当たらない。

本研究では、内モンゴル自治区の4つの行政単位(ソム、旗、市、首府)のモンゴル民族小学校における音楽教育を対象に比較研究を行うことによって、相違点と課題を明らかにし、モンゴル伝統音楽の学習が子どもたちの民族アイデンティティ形成にどのような影響を与えているのかを考察することを目的とする。本研究の意義は、音楽を通して民族文化を守ることの必然性を把握することである。

2. 調査の概要

2.1 対象地域と学校

内モンゴル自治区は、首府フフホト(呼和浩特)市を含み、ボゴト、烏海、赤峰、通遼、オールドス、フルンボイル、バヤンノール、オラーンチャブの9つの市、ヒンガン盟、シリーンゴル盟、アラシャン盟の3つの盟(モンゴルの伝統的な行政単位)を管轄する。その下位単位として、49の旗(モンゴルの伝統的な行政単位)、17県、3自治旗があり、さらにその下にソム(モンゴルの伝統的な行政単位)、鎮、郷が設置されている。

本研究で対象とする地域と学校は、以下のとおりである。

バヤンウンドゥル・ソムは、アルホルチン旗の中で唯一伝統的な遊牧生活を維持している牧畜地域である。ソム総面積は4,142平方キロメートルで、常住人口が約1万人である。その内、モンゴル民族はおよそ9,300人で、総人口の約93%を占めている⁵。したがって、民族音楽を含むモンゴル民族の伝統文化がほかの地域と比較してよりよく維持されていると考えられる。バヤンウンドゥル小学

⁵ 注1を参照。

校の所在地はバヤンウンドゥル・ソムである。全校生は計417人で、全員がモンゴル民族である。1年～6年まで12クラスが設置されている。

アルホルチン旗は、赤峰市の東北に位置し、面積は約14,277平方キロメートルである。常住人口は約27万人で、そのうち、モンゴル民族は約10万人である。アルホルチン旗には農村地域と半農半牧地域、それに牧畜地域が含まれ、7つの鎮、3つの郷と4つのソムから構成されている。チャブガ(天山鎮)はアルホルチン旗の中心地で、比較的に経済が発展し、交通も便利で、ソムに比べて文化上の漢化が進み、都市化している。ハーンオール小学校はアルホルチン旗の中心地チャブガ(天山)鎮に位置する。全校生は計1,049人で、全員がモンゴル民族である。1年～6年まで30クラスが設置されている。

赤峰市は、内モンゴル自治区の東南に位置し、総面積は90,021平方メートルで、3区7旗2県を管轄している。常住人口は約434万人で、内モンゴルの最大の人口を有する市である。そのうち約80万人がモンゴル民族である⁶。赤峰市は内モンゴル自治区の中でもっとも早くから漢民族が流入し、農耕化が進んだ地域であり、遊牧地域も一部保持されている。赤峰市モンゴル民族実験小学校は赤峰市都市部に位置する。名称は「モンゴル民族実験小学校」となっているが、モンゴル民族クラスと漢民族クラスが設置されており、約1,000人の子どものうち、約300人がモンゴル人の子どもである。1年～6年まで計25クラスあり、そのうち、モンゴル民族クラスが11クラスである。

フフホト(呼和浩特)市は、内モンゴル自治区の首府で、政治、経済、文化の中心地である。総面積は17,224平方キロメートルで、常住人口はおよそ287万人である。その中で、漢民族の人口は約250万人で87%を占め、モンゴル民族の人口は約29万人で10%、他の少数民族は8万人で3%を占めている⁷。フフホトモンゴル民族実験小学校の生徒数は計2,548人で、全員がモンゴル民族である。1年～6年まで44クラスが設置されている。

本研究では、内モンゴル自治区の4つの行政単位(ソム、旗、市、首府)に即して、ソムの小学校としてバヤンウンドゥル小学校を、旗の小学校としてチャブガにあるハーンオール小学校を、市の小学校として赤峰市モンゴル民族実験小学校を、首府の小学校としてフフホトモンゴル民族実験小学校を調査対象とした。以上のように、大都市から1校、中都市から1校、小さな町から1校、牧畜地域から1校を選択した理由は、行政単位の違いによりモンゴル人の割合が異なり、学校をとりまく環境・文化が異なるからであり、それによって音楽科教育にどのような相違が生じるのかを明らかにするためである。

2.2 調査方法

筆者は、この4つのモンゴル民族小学校を対象に、2018年5月から11月にかけて4回にわたって調査を実施した。本研究では、その調査内容に基づき分析と考察を行う。撮影やインタビュー録音などは、すべて校長と各教師の許可を得ている。調査内容・方法は以下の通りである。

- ① 本研究に関連する文献調査及び情報を収集する。
- ② モンゴル語版の音楽科教科書と4つのモンゴル族小学校の音楽科授業に用いる設備、楽器など

⁶ 注1を参照。

⁷ 同上。

に関する調査を行う。

- ③ 各学校の音楽科授業の相違点と課題を明らかにするため、4つの小学校の実際の音楽科授業を観察する。
- ④ 歌詞の取り扱い方から、子どもたちのモンゴル民族文化への関心と理解の程度について分析する。
- ⑤ モンゴル伝統音楽の項目が設置されている課外活動に関する調査を行う。
- ⑥ モンゴル伝統音楽の学習が民族アイデンティティ形成に与える影響について、課外活動や鑑賞の授業においてモンゴル伝統音楽の学習が行われている学校の教師にインタビュー調査をする。質問内容は、モンゴル伝統音楽の学習を通じての音楽価値観、民族文化の理解、民族意識などの面で、子どもたちに何か変化が生じたかである。

3. 調査の結果

3.1 教科書に取り入れられたモンゴル伝統音楽

中国政府は、国家統合と、統一した民族意識を高めることを主張してきた。2011年に中国国家教育部から公布された「義務教育音楽課程標準」(2011年版)の「課程基本理念」の部分に「民族音楽を發揚し、音楽文化の多様性を理解する」と明確に提案している(中華人民共和国教育部2011、p.5)。そこには、音楽を通して子どもたちに、国家を愛し、理解する気持ちを持たせるには、各民族の優秀な伝統音楽を音楽教材の中に取り入れることが重要であると明記している。その伝統音楽のジャンルとして、漢民族を含む56民族の代表的な民間歌曲、民族舞蹈曲、民族器楽曲と中国の古典演奏劇である京劇曲などが取り上げられている。中国の一般音楽科教科書(漢語版)に取り入れられた伝統音楽は、主に民間音楽、人文音楽、宮廷音楽、宗教音楽である。その中でも民間音楽が最も多く使われている。民間音楽には、民間歌曲、歌舞音楽、弾き語り音楽、民族器楽曲などが含まれている。また、歌詞を表現した写真や絵なども描かれている。

小学校の音楽科教科書は、学年ごとに前期と後期を合わせて2冊出版され、1年生から6年生まで合計12冊である。内モンゴル自治区のモンゴル民族小学校で使用されている音楽科教科書は、中国人民出版社が中華人民共和国教育部から発行された「義務教育音楽課程標準」(2011年版)を基準に出版した音楽教科書を、内モンゴル自治区教育出版社がモンゴル民族自治区の特徴に合わせて編集し、モンゴル語で出版したものである。

モンゴル語版音楽科教科書(全12冊)の歌唱項目と鑑賞項目に取り入れたモンゴル伝統音楽の占める割合を示したのが図1、図2である。

図1を見て分かるように、①歌唱項目のうち、モンゴル創作歌曲が78%、モンゴル伝統民間歌謡が12%、外国の歌曲が4%、その他(中国国歌、政治歌曲など)が約6%を占め、多くはモンゴル草原、家族、家畜、生活、習慣等民族文化をテーマにしたモンゴル創作歌曲で、モンゴル伝統民謡と外国の歌曲が比較的少ない。歌唱項目においては、モンゴル創作歌曲を中心とするのではなく、モンゴル伝統民謡の取り入れを重視し、その曲数を増加し、バランスの取れた歌曲内容を充実させるべきではないかと考える。

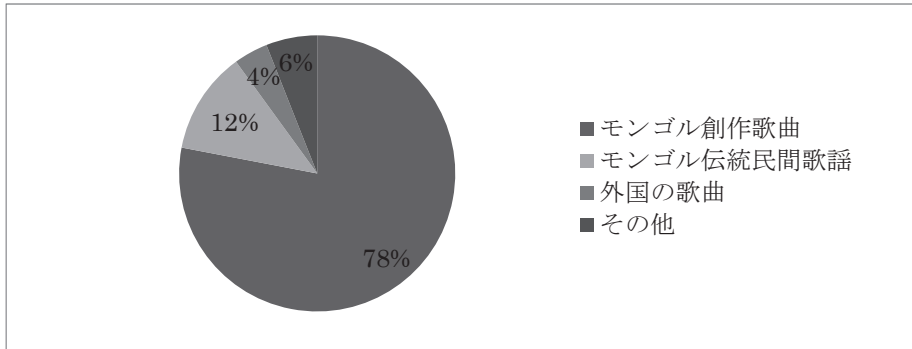


図1 歌唱項目に取り入れたモンゴル伝統音楽の割合

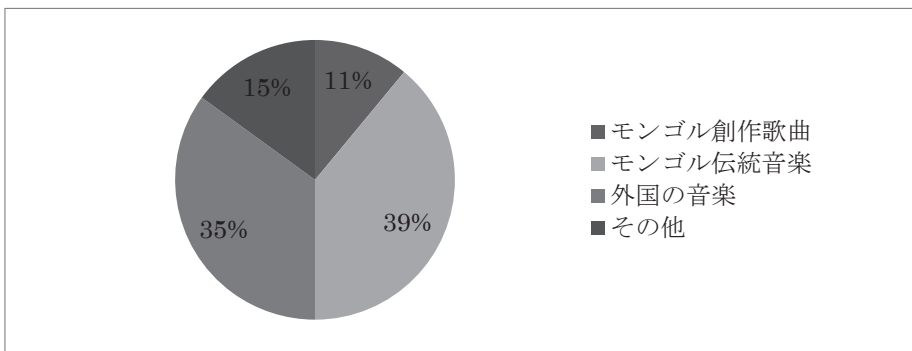


図2 鑑賞項目に取り入れたモンゴル伝統音楽の割合

一方図2では、②鑑賞項目のうち、モンゴル創作歌曲が11%、モンゴル伝統音楽が39%、外国の音楽35%、その他が約15%を占めている。鑑賞項目においては、モンゴル伝統音楽と外国の音楽が比較的多く取り入れられている。このことから、鑑賞の授業を通して、子どもたちにモンゴル伝統音楽文化と外国の音楽文化を理解させることを目的としていると言えよう。

3.2 4つの小学校の音楽科授業の内容

内モンゴル自治区のすべての小学校では、授業は1週間に2コマ、1コマの時間は40分と決まっている。小学校音楽科教師用のモンゴル語版『教師教学用書』⁸がまだ出版されていないため、音楽の教師たちは、各自で学校の状況や子どもの趣味などに合わせて教育内容を調整しながら授業を行っている。

4つのモンゴル民族小学校における音楽科授業の様子を以下の3点から考察した。

① 4つの小学校の音楽科授業に用いる教室及び教科書

⁸ 中国の一般音楽科教科書において、「義務教育音楽課程標準」(2011年版)を基準に編集した『教師教学用書』(漢語版)が出版されているため、漢民族の小学校音楽科の教師は、この指導案を用いて授業を行っている。

表1 教室及び教科書の使用方法

地域・(行政単位)	バヤンウンドゥル (ソム)	チャブガ(旗)	赤峰市(市)	フフホト (自治区首府)
学校名・学年	バヤンウンドゥル小 学校5年2組	ハーンオール小学校 5年2組	赤峰市モンゴル民族 実験小学校4年2組	フフホトモンゴル民 族実験小学校2年2組
教室	一般教室で電子キーボードやCDプレーヤーを持ち込む。			設備が整った音楽科 授業のための教室
教科書	子どもたち全員が音楽科教科書を所持しておらず、決まった数の教科書を同じ学年の間で回覧している。具体的には、授業直前に教師がクラスの子どもたちに教科書を配って授業を行い、授業後全部回収して、また他の同学年の授業に配って使うという方法である。			子どもたち全員が教 科書を所持している

表1にまとめたように、フフホトモンゴル民族実験小学校では、教育資金が豊富で、学習環境、設備や楽器まで充実している。さらに、音楽科授業のために設けた教室があり、音楽科教科書も整っている。これに比べてバヤンウンドゥル小学校、ハーンオール小学校と赤峰市モンゴル民族実験小学校の3つの学校では、音楽教育に必要な教室、設備、楽器、教材など、最も基本的な学びの環境も充実していない。

② 実際に観察した4つの学校における歌唱授業の様子

バヤンウンドゥル小学校5年2組の歌唱授業の流れ

- ・リラックス体操
- ・音階の練習
- ・発声練習・腹式呼吸のトレーニング
- ・前回の授業で習った歌の復習 歌の名称「ハバル・イルレー」(春が来た)
- ・新しい歌の学習 歌の名称「モンゴル・ソルゴリ・サイハン」(モンゴルの学校はすばらしい)
- ・曲のメロディ・リズム・テンポなどを説明する。
- ・歌詞を分析する。
- ・歌のCDを何回か聴かせる。
- ・先生が歌う手本を聴き、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。

ハーンオール小学校5年2組の歌唱授業の流れ

- ・音階の練習
- ・新しい歌の学習 歌の名称「タバン・トゥルテイゲー・トゴルノ」(五畜の子と遊ぶ)
- ・生徒たちにモンゴルの五畜(馬、牛、ラクダ、羊、ヤギ)の写真を見せながら、遊牧生活について質問する。
- ・歌詞を分析する。
- ・歌のCDを何回か聴かせる。
- ・先生が歌う手本を聴き、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。
- ・子どもたちに手を挙げさせ、自発的にみんなの前で歌わせる。

赤峰市モンゴル民族実験小学校4年2組（モンゴル民族クラス）の歌唱授業の流れ

- ・音階の練習
- ・新しい歌の学習 歌の名称「ソルゴリダー・オチノ」（学校に行く）
- ・楽譜を覚える。
- ・曲のメロディ・リズム、テンポなどの説明
- ・歌詞の分析
- ・先生の伴奏に合わせて歌う（間違った部分について、先生が重点を教え直す）。
- ・皆で手拍子をしながら歌う。
- ・いくつかの組に分かれて歌う形式で授業内容を再確認する。

フフホトモンゴル民族実験小学校2年2組の歌唱授業の流れ

- ・音階とリズムの練習
- ・歌の楽譜、歌詞をLEDプロジェクターに映し、先生がピアノで弾きながら教える。歌の名称「マナイ・デルヒー・ハハハ」（私たちの世界）。
- ・歌詞の分析（生徒に歌詞を読ませ、分析させる）。
- ・先生が歌う手本を聴き、互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。
- ・皆で手拍子をしながら歌う。
- ・生徒たちに手を挙げさせ、自発的に皆の前で歌わせる。

授業の流れにおいて、4つの学校は、いずれも「歌を教える」ことに重点を置き、子どもたちの創造力などを引き出したり、発揮させたりするための実践活動などはあまり見られない。

歌詞の理解の観点から見ると、バヤンウンドゥル・ソムは、遊牧生活を維持している牧畜地域であるため、民族文化、生活などへの理解が深く、これによってより有効な音楽の学習ができていると言えよう。バヤンウンドゥル小学校の授業での「モンゴル・ソルゴリ・サイハン」という歌を事例にあげれば、その歌詞に「モンゴルの学校が騎馬民族の未来」という部分があり、騎馬民族に関する教師の質問に対して、子どもたちが馬とモンゴルの生活、遊牧文化との関連性についてスムーズに答えていた。一方、ほかの3つの学校で教えた「タバン・トゥルテイゲー・トゴルノ」、「ソルゴリダー・オチノ」、「マナイ・デルヒー・ハハハ」などの歌の歌詞も基本的に民族文化や生活などに関わるものであるが、この3つの学校の子どもたちの理解度は、バヤンウンドゥル小学校の子どもたちと比べると明らかに低い。

チャブガは放牧地区に近いところに位置し、モンゴル民族の文化と生活に触れ合う機会が多少ある。それゆえ、ハーンオール小学校の子どもたちは、民族の文化や生活についてある程度答えられている。フフホト市は内モンゴル自治区の政治、経済、文化の中心地であるため、伝統行事や文化活動などが多く開催されている。したがって、フフホトモンゴル民族実験小学校の子どもたちの歌詞への理解は、ハーンオール小学校の子どもたちとほぼ同じ程度である。一方、赤峰市モンゴル民族実験小学校は、内モンゴル自治区の中で最も言語文化的に漢化が進んでいる同地域の都市部に位置し、伝統行事や文化活動などが比較的少ないため、子どもたちの民族文化や生活への理解が4つの学校の中で最も低く、子どもたちも歌唱の授業にあまり興味を示さない。また、赤峰市モンゴル民族実験小学校には漢民族クラスも設置され、その子どもの数がモンゴル語授課クラスの子どもの3

倍以上もあることが、モンゴル人の子どもたちのモンゴル語能力の低下に強い影響を与えているのであろう。

③ 4つの学校における鑑賞の授業の様子

4つの学校における鑑賞の授業を観察したところ、バヤンウンドゥル小学校、ハーンオール小学校、赤峰市モンゴル民族実験小学校の3つの学校では、CDプレーヤーを使って、教科書に載っている曲を聴くだけであった。これに対し、フフホトモンゴル民族実験小学校では教育資金が充実しているため、施設や楽器に配慮があり、プロジェクターなどを用いた音楽鑑賞の授業を行い、子どもたちの自民族文化、生活及び伝統音楽への理解を高めていると言えるだろう。

3.3 4つの小学校におけるモンゴル伝統音楽の学習

4つの小学校とも課外活動の時間帯が決められている。そこにモンゴル伝統音楽の項目が設置され、子どもたちが各自の興味によって教室を選べるようになっている。バヤンウンドゥル小学校、ハーンオール小学校、赤峰市モンゴル民族実験小学校の3つの学校では、平日の午後最終の8時限に30分の課外活動が設置されている。一方、フフホトモンゴル民族実験小学校の課外活動の時間帯は、ほかの3つの小学校とは違って毎週金曜日5時限と6時限に集中的に行うように設置されている。

実際に行っているモンゴル伝統音楽の課外活動が「表2」で示されている。

表2 モンゴル伝統音楽の学習内容

バヤンウンドゥル小学校	ハーンオール小学校	赤峰市モンゴル民族実験小学校	フフホトモンゴル民族実験小学校
	<ul style="list-style-type: none"> ・モリンホール (馬頭琴) 教室 ・ヤトガ ・オルティーン・ドー (民謡) 		<ul style="list-style-type: none"> ・モリンホール (馬頭琴) 教室 ・ヤトガ教室 ・トブショール教室 ・ドゥルブン・オタスト・ホール (四胡) ・オルティーン・ドー (民謡)

バヤンウンドゥル小学校の課外活動では、モンゴル伝統音楽の学習は行われていない。一部のモンゴル伝統楽器 (モリンホール、ドゥルブン・オタスト・ホール) はある程度整っているが、それを教える教師がいない。ただし、教師へのインタビューによると、毎年恒例の学校祭や子どもの日などのイベントが行われる際には、全校の中から才能のある子どもたちだけが選ばれ、臨時に雇った非常勤講師の指導を受ける場合がある。

赤峰市モンゴル民族実験小学校の課外活動では、バヤンウンドゥル小学校と同じく、いくつかのモンゴル伝統楽器はある程度揃っているが、実際にモンゴル伝統音楽の学習は行われていない。赤峰市都市部では、モンゴル伝統音楽のイベントや音楽教室などが比較的少ないことと、赤峰市モンゴル民族実験小学校の課外活動において伝統音楽の学習が行われていないため、赤峰市モンゴル民

族実験小学校の子どもたちはモンゴル伝統音楽との触れ合いが非常に少ないと言える。

一方、ハーンオール小学校とフフホトモンゴル民族実験小学校の2つの学校では、数多くのモンゴル伝統音楽の中から各自の地域と学校の現状にあわせていくつかの伝統音楽の教室を設置している。そして、その地域におけるフリーの演奏家や音楽集団の人を非常勤講師として招き、毎週のように活動を行っている。また、チャブガとフフホト市にはモンゴル伝統音楽のイベントや音楽教室などが比較的に多いため、フフホト民族実験小学校の子どもたちはモンゴル伝統音楽と触れ合える機会が比較的多いと言える。

3.4 モンゴル伝統音楽の学習が子どもたちの民族アイデンティティに与える影響

モンゴル伝統音楽の学習が子どもに与える影響について、調査方法⑥に基づいて、4つの小学校の中から、課外活動が行われているハーンオール小学校の音楽科教師2名と鑑賞の授業及び課外活動の両方が行われているフフホトモンゴル民族実験小学校の音楽科教師4名の計6名を対象に2018年6月25日にインタビュー調査を行った。質問「モンゴル伝統音楽の学習を通して、子どもたちに、音楽価値観、民族文化の理解、民族意識などの面で何か変化が生じたか」に関する回答はほぼ一致していた。それを以下のようにまとめる。

教師に対して行ったインタビュー調査の結果

- ・モンゴル伝統音楽に興味を示す子どもが明らかに増えた。
- ・モリンホール（馬頭琴）、ホーミーなどの学校外の音楽教室に通い、本格的に学ぶ子どもが増えた。
- ・民族楽器をある程度弾けるようになった子どもたちに自信が芽生え、学校内外の大小イベントなどに積極的に参加するようになった。
- ・モンゴル民族文化に関心を持ち、夏休みなどに牧畜地域に行きたがる子どもが多くなった。
- ・中国語を混ぜずモンゴル語で会話することを心がける子どもが増えた。
- ・祭りとかでモンゴル民族衣装を着る子どもが増えた。

近代化が進んだ都市部出身のモンゴル人の子どもたちにとって、自民族の文化、生活習慣に触れ合う機会は非常に少ない。都心部では、プロの音楽集団やフリーの音楽家によるモンゴル伝統音楽のイベントや活動などが数多く開催されているが、流行の音楽やアニメソングなどが小学生の間で大きなブームになっている近代社会において、モンゴル人の子どもたちが自民族の伝統音楽にあまり興味を示さないのが現状である。

ハーンオール小学校の音楽科教師2名とフフホトモンゴル民族実験小学校の音楽科教師4名に行ったインタビュー調査から見れば、モンゴル民謡の学習、モンゴル伝統音楽の鑑賞及び課外活動における伝統音楽の学習を通じて、モンゴル伝統音楽に興味を持ち、本格的に学ぶ子どもが増え、校内外の大小イベントなどに積極的に参加するようになっていくことが明らかになった。こうしたことが子どもたちの自尊心とモンゴル民族としての意識を高め、自民族の文化をもっと知りたい、理解したい、民族衣装を着たい、モンゴル人同士で常にモンゴル語で会話したいというような民族意識の育成に繋がっていくだろう。

4. 総括

本研究では、文献調査、現地調査及びインタビュー調査などに基づいて、内モンゴル自治区の4つの行政単位のモンゴル民族小学校における音楽教育を対象に比較することによって、相違点と課題を明らかにし、モンゴル伝統音楽の学習が子どもたちの民族アイデンティティ形成に与える影響について考察した。

調査の結果、音楽教科書の分析から、鑑賞項目にモンゴル伝統音楽が多く取り入れられているが、フフホトモンゴル民族実験小学校でしか鑑賞の授業は行われておらず、4つの学校とも歌唱の授業に重点を置いていることが明らかになった。

また、4つの地域におけるモンゴル文化と伝統音楽の位置づけや学校の現状と教師の資質などの違いによって、モンゴル伝統音楽が子どもたちの身近に存在しているか否かが異なり、それによって、音楽科授業におけるモンゴル伝統音楽に対する子どもの関心・意欲が異なることが明らかになった。さらに、音楽科教師たちへのインタビュー調査の分析により、モンゴル伝統音楽の学習が、子どもたちの民族アイデンティティの形成に少なからず影響を与えていることが明らかになった。

今後の課題としては、調査地域の範囲を広げ、最小の行政単位であるソムをはじめ、アルホルチン旗、赤峰市、内モンゴル自治区の首府フフホト市の4つの地域の漢民族小学校における音楽教育を対象に調査し、モンゴル民族小学校と比較研究を行いたい。

【引用文献・参考文献】

日本語文献

- 格日樂 (2006) 「中国民族教育における教育自治権について—民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に—」『一橋法学』第5巻第3号、pp.1041-1064
- 項純 (2000) 「中国における素質教育をめざす基礎教育改革をめぐる論争」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第56号、pp.359-371
- 崔淑芬 (2011) 「内モンゴル自治区の教育現状の一考察」『筑紫女学院大学・筑紫女学院大学短期大学部紀要』第6号、pp.155-166
- 賽漢花 (2017) 「学校統合政策による民族教育の変容：中国内モンゴル自治区赤峰市を中心に」『日本モンゴル学会紀要』第47号、pp.33-46
- 筒石賢昭・沈莉卓 (2013) 「中国における伝統音楽教育改革の試み」
www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/rengou/kyouin/news/data_kouiki_h25/10.pdf#search=%27 (2019年7月21日閲覧)

中国語文献

- 貴雪 (2018) 「内モンゴル地方民歌在小学音乐课程中的实践探求」内蒙古師範大学修士論文
- 胡宏莉 (2013) 「中国伝統音楽在人教版義務教育音楽教育中的運用」『音楽天地』第10期、pp.27-28
- 劉卓群 (2013) 「非物質文化遺產視野下的冬布拉制作傳承研究」新疆師範大学修士論文
- 王漢君 (2007) 「音楽教師教育面臨的困鏡与出路」『音楽教学与研究』第1期、pp.15-17

- 楊夢嬌 (2016)「現代化語鏡中蒙古族基本音樂教育的變遷」內蒙古藝術學院修士論文
- 趙淑萍 (2009)「淺談少數民族音樂在中小學音樂教育中的地位」『吉林省教育學院學報』第12期第25卷、pp.8-9
- 張婷 (2015)「內蒙古地區中小學民族音樂教育存在的問題及改進對策」『內蒙古師範大學學報·教育科學版』第28卷第8期、pp.170-172
- 張惠萍 (2016)「淺談小學音樂教材中的中國傳統音樂教材」『音樂天地』第10期、pp.12-14

資料·教材

- 中華人民共和國教育部 (2011)『義務教育新音樂課程標準』(蒙語版) 內蒙古自治區教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 一年生上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 一年生下冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 二年級上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 二年級下冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 三年級上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 三年級下冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 四年級上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 四年級下冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 五年級上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 五年級下冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 六年級上冊」內蒙古教育出版社
- 內蒙古自治區教育出版社蒙古文音樂教材編集部 (2014)「音樂 六年級下冊」內蒙古教育出版社

SUMMARY

Based on literature survey, field observation, interview survey, this study makes a comparative study on music education of Mongolian ethnic primary school in four administrative units of Inner Mongolia to clarify the differences and challenges on music education. At the same time, this study also aimed to examine the impact of learning Mongolian traditional music on the formation of children's ethnic identity.

Therefore, we found that the appreciation items include extensive traditional Mongolian music, but the appreciation lessons are only held in one school, while the four schools focus on singing lessons. Besides, depending on the differences in the position of Mongolian culture, traditional music, and the current state of schools, and also depending on whether the children are familiar with Mongolian traditional music or not, children's interests and motivations about Mongolian traditional music in music class are also different. Furthermore, the interview survey of music teachers showed that learning Mongolian traditional music is conducive to the formation of children's ethnic identity.